

国立国語研究所学術情報リポジトリ

方言の録音についての手びき

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 国立国語研究所話しことば研究室 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00003699



方言の 録音に ついての 手びき

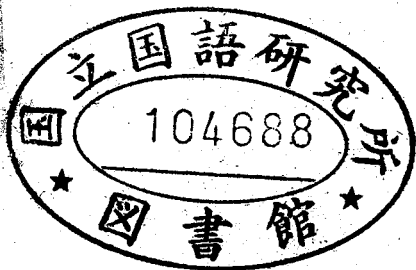
099
126
1001080678

国立国語研究所 話しことば研究室

1970

このパンフレットは方言の日常会話や民話などを研究資料として録音しようとするひとびとのために録音についてのごく実務的な注意をこらしたものです。録音に慣れていないひとを念頭においてやさしくかいてあります。

録音にでかけるまえに およみください。



目 次

まえがき.....	1
1 テープレコーダーについて.....	2
2 録音まえの準備.....	5
(1) 電源周波数の確認.....	5
(2) テープレコーダーの付属品の点検.....	6
3 録音現場での注意.....	7
(1) 録音の場所.....	7
(2) はなし手の数.....	8
(3) マイクのおき場所とテープレコーダーの音量.....	8
(4) 録音テープ.....	10
(5) 録音中、録音後のしごと.....	11

まえがき

録音の目的が個人的なものであったり、あるいは単にはなしのなかみのおおよそをつかむためだったりするばあいは、さして問題にならないのですが、のちのちまでおおくのひとびとに研究資料としてくりかえし利用される可能性のあるものを録音するばあいには、ゆるされる範囲内でできるだけよい音質の録音をとっておきたいものです。なかみがすぐれた方言資料であっても、音質がわるくて雑音だらけだったりすると資料としてのねうちはなくなってしまいます。また、苦心のすえの録音がふとした手ちがいや、無知のために失敗したら苦心も水のあわです。おなじテープレコーダーをつかっても機械のあつかい、そのほかの条件によって、録音される音質はさまざまになります。

1 テープレコーダーについて

実 用

家庭や つとめ先などに そろえつけの 機械をつかう ばあいは、できれば、なるべく 高性能の しかも あまり つかいふるして いない 機械を 利用すべきでしょう。現在では テープレコーダーは ひじょうに 普及して、たくさんの 機種が だまわって いますが、性能には かなり おおきき ひらきがあります。とおくに もち はこびする ことを かんがえると つい 小型で かるい ものをと いう ことに ながちですが、一般に 小型の ものでも あまり ねだんの やすい ものは 性能も おとし、部品の 吟味が じゅうぶんで ない ために、故障を おこしやすい 傾向が あります。また、とくに 普及型の 家庭用の ものの ばあひ、ながく つかいふるした ものは 一般に 部品の 消耗に よって 故障が おおかったり 特性が 劣化して いたり しますから、そういう 機械をつかう ときは、でかける まえに じゅうぶん 点検を してください。はんたいに、かった ばかりの 機械の ばあひは、テストを やりかえして 故障が おきないか たしかめ、また、機械の 操作にも 慣れて おく ことが 必要です。一般に よい 音質を える ためには 多少 大型でも なるべく 高性能の ものを もって いくの が いいでしょう。高性能と いう ことの 一応の 目安と しては 故障を おこしにくい ことの ほかに、とくに テープの おくりに ムラが 生じない ことと、周波数特性が よい ことの 二つが まず あげられます。なお、携帯用の 小型機の ばあひ、容積や 価格の 関係で 小型の スピーカーや 安物の イヤホンしか ついて いない ために、その 機械では 実際に 録音された 音質より わるい 再生音しか きけないと いう ことが おこります。この ばあひ よい 再生音を える ためには べつ の 高性能の 機械に テープを かけて きくとか よい スピーカーや ヘッドホー

ンを介する 必要が おきます。

最近 は ステレオの テープレコーダーが しいに しまわって きました。録音は もちろん 従来の モノラルの ものでも いいの ですが、ステレオの 機械は、音楽の 録音ばかりで なく 会話の 録音の ばあいにも、利点 を もって います。それは ステレオで 録音した テープを 二つ以上の スピーカーに よって ステレオで 再生した ばあい、対話者の かさなりあった 音声が 識別しやすく なるし、音声が 雑音から うきあがって きこえるからです。モノラルの ばあいだと かさなりあった 音声や 雑音が すべて ある 一点から 発する ように きこえ、ちょうど 片耳で きいた とき の ように なって、両耳で きいた とき の ような 音の 立体感 は なくなり ます。ですから ステレオで とった テープは 音声を 文字に よる テキストに する 作業に たいへん 有利だし、また、録音資料としても すぐれている という わけです。また、録音を 文字に する ための ききとりの 作業を おこなう ときには こきざみに 何度も 録音器の 再生と まきもどしとを くりかえして 機械の その 部分を 酷使 します。ですから これには なるべく 大型の 堅牢な 機械を つかった ほうが いいでしょう。

また、テープを おくる スピードには、ふつう 毎秒 3.8cm 、 1.9cm 、 9.5cm 、 4.75cm の 4種類が あって、たいいてい の 機械に は そのうちの 2種類 (小型機では 4.75cm/s と 9.5cm/s の くみあわせ、中、大型機では 9.5cm/s と 1.9cm/s の くみあわせが おおい。) は ついて います。音楽の ばあいは 音質保持の ために 1.9cm/s 、 3.8cm/s の ような、テープを おおく 消費する 速度が このまれますが、音声の ばあいなら 9.5cm/s でも 音質の 点では ほぼ じゅうぶんだと いえます。また 互換性の 点から みても 毎秒 9.5cm/s の 速度で 録音するのが べんり

でしょう。なお、最近 でまわって きた カセット式の 機械の テープ速度は 毎秒 4.75cm、1種類の ようで、カセット式相互の あいだでは テープの 互換性が、ありますが、ふつうの 機械で きく ためには ふつうの テープに うつしかえる 手間が かかります。

また、屋外での 録音や、電源電圧が 不安定な、または 電気の 供給時間が 制限されて いたり、電気が なかったり する 僻地や 離島での 録音には 電池を もちいる 直流式の 機械か、コンセントと 電池の 両方から 電気の とれる 交直両用式の 機械が 必要に なります。

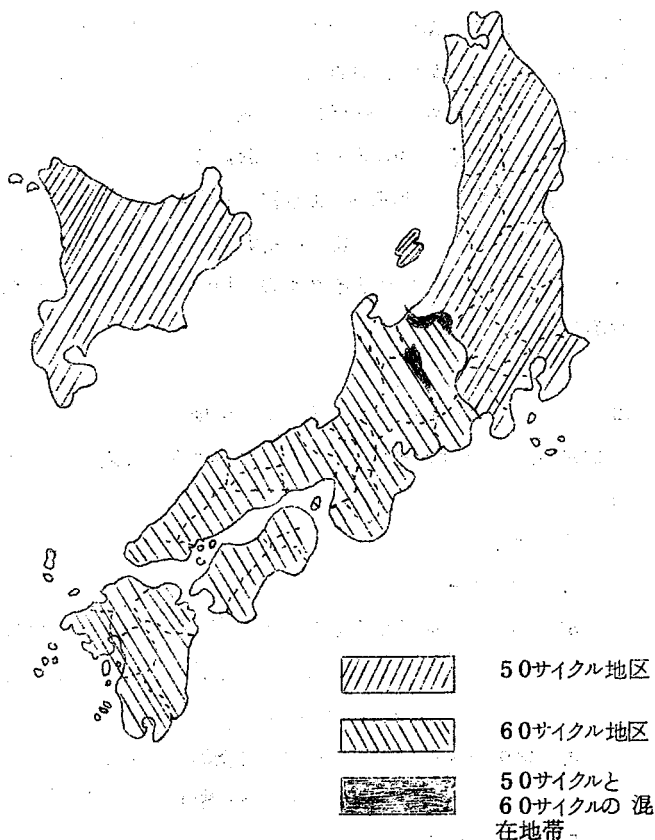
なお、マイクは 機械に 付属した ものが その 機械の 性能に あって いますから、原則と しては それを つかう べきです。ほかの マイクを つかったり、マイクロホンミキサーに よって ほかの マイクと 併用したり する ばあいは インピーダンスの ちがいに よって 感度が おちたり、感度の アンバランスが おきたり しないか、じゅうぶん 注意して ください。マイクロホンミキサーは 多人数の 声を 録音する ために、いくつかの マイクを つかいたい ときに 必要に なりますが、その ばあいにも 感度の 低下に 注意する 必要が あります。

録音テープは リールの 直径 7インチ、5インチ、4インチ、3インチなど 数種類が でまわって いますが、機械に かかる おおきさの ものを 用意する 必要が あります。また、おなじ おおきさの テープでも、標準の 1.5倍、2倍などの ながさの ものも 市販されて いて、それだけ ながい 時間 録音できます。また、録音テープは 長時間 つかって ふるく になると 材質の 変形などによる 悪影響が おこりえますので、たいせつな 録音には 新品を つかうのが 無難です。

2 録音まえの準備

(1) 電源周波数の確認

日本の電力は電源周波数にふたとおりあって、東日本では50サイクル、西日本では60サイクルとなっています。このため電気器具も50サイクル用と60サイクル用の2種類がつけられていて、それぞれの地方ではそのサイクルにあっ



た機械が うられて います。テープレコーダーの ばあい、録音した テープを ほかの 機械や ほかの 地方で ただしい 速度で 再生して きける ように する ためには かならず 採集する 地点の 電源周波数に あった 機械で 録音しなければ なりません。機械に よって キャップスタン その他が 簡単に 自分で きりかえられる ように なって いる ものと、販売店、サービス・ステーションなどで 内部を なおして もらわなければ ならない ものの ふたとおりが あります。いずれの ばあいも 機械の とりあつかい説明書を よく よんで ただしい 処置をおこなって ください。ただし 交直両用機の ばあいには 電源周波数に 関係なく つかえます。なお、50サイクルと 60サイクルの 境界地帯は 地図の ように 新潟、長野、静岡に あり、ことに 長野県の 西部と 北部、それに 新潟県の 西部は 50サイクルの 地帯と 60サイクルの 地帯とが 入りみだれて いますから 注意を 要します。

(2) テープレコーダーの 付属品の 点検

付属品は わすれやすいので でかける まえに 点検しましょう。

1. マイク
2. 録音テープ
3. からりール (おくりの ムラが おきない ように 使用録音テープと おなじサイズの ものを つかう べきです。)
4. レシーバー (イヤホン または ヘッドホン……試験用 および モニター用)
5. テーブルタップ

- (コンセントの場所がとおいときにつか
います。市販のものでまにあいます。)
6. 電池 (電池式のばあいのみ。電圧の不足がおき
ないように予備をふくめて。)
 7. 防振材料 (マイクの下にしいて、振動をふせぐた
めのもの。ハンカチなどでもよいが、ゴム
やあつめのやわらかい布がよい。)
 8. 接着テープ (録音テープをつなぐためのもの。)
 9. はさみ (録音テープをつなぐときにつかう。)
 10. ドライバー (プラスとマイナスをおのおの1本ずつ。
さしこみなどの簡単な故障に対処する
ため。)

11. 絶縁テープ

このほか現地でテープの編集をおこなうばあいは、予
備のからリール、リーダーテープなどがあるとべんりです。

3 録音現場での注意

(1) 録音の場所

できるだけ雑音のすくない場所をえらびたいものです。
ふだんは気にかからない雑音がテープできくとひじょう
に気になるものだからです。道をはじるトラックの音、
廊下をとおるひとの足音、風で戸がゆれる音、扇風機の
音、はなし手が机をたたく音などがしばしばおおきなバ
ックノイズになりますから、ゆるされるかぎりしずかな場所
をえらんでください。また、いわゆる壁にかこまれて音が
こもる残響のおおい部屋も条件としてはよくありません。
こんなときはカーテンをひいたり、またまわりがしず

かから ガラス戸などを あけた ほうが いいでしょう。残響の程度は 部屋の 中央で 手を たたいて みれば すぐ わかります。さらに、はなし手に 緊張感を あたえない くつろげる 場所であるという ことも もちろん 大切な 条件に なります。

(2) はなし手 の数

おもいでばなしなどを 録音する ばあい はなし手の 人数がおおすぎると、しばしば 声が かさなりあって、あとで ききとることが できなく なります。あとで よく ききとれる ようにはなし手の 数は ふたりか せいぜい 3人までに するのが いいでしょう。多人数でも 主役いがい は きき手に まわるとか、また、ひとりずつ 交互に 発言して くれれば 問題は ないのですが はなしに 興が のると 自然 みんなが いっせいに シャベリだす ことが おこりがちです。また、多人数だと あとで 声の ちぬしを 識別する ことが むづかしく なりがちです。なお、声の 識別は はなし手が 男と 女の 組合せである ばあい、もっとも らくに なります。

(3) マイクの おき場所と テープレコーダーの 音量

ふつうの ばあい、マイクは はなし手の 口に あまり ちかすぎたり、とおく なりすぎたり しない 位置、だいたい 30cmから 1mぐらいまでの 距離に おきます。そして テスト録音によって はなし手が 会話の なかで いちばん おおきな 声を だした とき、テープレコーダーの 音量指示計が 適切な 音量の 限界を しめす 位置に くる ように 録音音量ツマミを 調整します。また、対話する ふたりの 音量が 極端に ちがう ばあい は、音量の ちいさい ひとの ちかくへ マイクを おいて バラ

ンスをとります。音量の調整はひじょうにたいせつでしばしば大事をとって音量をおおしくしすぎて、録音された声がわれてしまったり、ちいさくしすぎてききとりにくくしたりしがちです。さいしょの録音レベルのセットはもちろん、録音中の音量の変化にもじゅうぶん注意しましょう。

マイクをはなし手にちかづけすぎてはいけないのはおお声になったときに声がわれないようにするためであり、またマイクに息がかかったときに生じる一種独特な不快な音をいれないためです。とおざけすぎてはいけないのは声をまわりの雑音にくらべて相対的におおきくとらえたいためです。マイクがとおくなればなるほど声はまわりの雑音のなかにうずまって録音されます。ですからまわりにおおきな雑音があるときには録音のボリュームをあげずにマイクをなるべく口にちかい位置におくことによって雑音から音声をきわたさせます。

なお、マイクがテープレコーダーから発する機械的な雑音をひろわないように、テープレコーダーはマイクからはなれた位置におくのが当然です。マイクは机などをつたわってくる振動にも敏感で無意識に机をたたいたり、茶碗をおいたり、灰皿をひきずったりする音もおおしくとらえてしまいます。これをいくらかでもふせぐためには防振材としてあつめのやわらかい布などをマイクの下にしくといていでしょう。

また、マイクには裏に低音域補償用のちいさな穴があられているものがあるので、手にもってつかうばあいは、そこをふさがないように注意してください。

なお、はなし手を緊張させないためにはテープレコーダーの

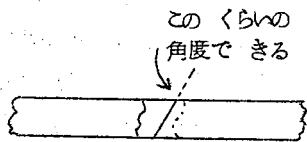
本体を隣室などはなし手にみえないところにおいたり、マイクにハンカチをかぶせたりすれば効果があるでしょう。

(4) 録音テープ

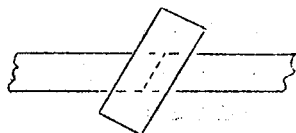
録音テープをはしらせるスピードは機械によって毎秒3.8cm, 1.9cm, 9.5cm, 4.75cmの4とおりがあり、録音テープのスピードがはやければ1巻あたりの録音時間がみじかくなります。はやいほうが回転ムラや周波数特性の低下をふせいでよい音質がえられますが、9.5cmならばまず音質についての心配はなく、かつ、テープの互換性がおおきいのでこれがいちばん適当でしょう。ただし放送用は1.9cmや3.8cmがふつうのようです。

また、あとできったりつないだりして編集するためには往復録音のできる機械のときでもテープは片道しかつかわないほうがべんりです。

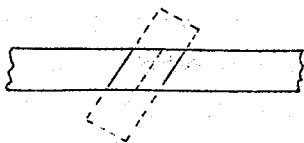
なお、きれたテープをつないだりテープを編集したりするときには規定どおりにななめにきってつなぐようにしてください。そうしないと余計なブツンという音はい



(1) つなぐテープの両端をただしくかさねてななめにきる



(2) ベース側に接着テープをつけてつなぐ



- (3) 接着テープが 録音テープから
はみださない ように きりお
とす

テープをつかうとはがれたり 溶剤が はみでたり して テープをいためる 原因に なります。

テープの はじめや おわりの 部分には ながめの リーダーテープをつけると 録音テープが 保護されるし、録音の スタートや おわりの 位置を ハッキリさせる ことができます。また、何種類かの 録音を まとめて 1巻の テープに 編集する ばあい、つなぎ目に 色の ついた リーダーテープを ながめに いれて おけば 再生の ため 場所を さがす ときに べんりです。

テープを 保存する ときには ほこりが たまらない ように ケースに いれて、テレビの そばなど つよい 磁界の ある ところを さけて しまって ください。

なお、テープが よごれて いると 録音機の ヘッドを よごして 録音、再生の 音質を おとす 結果に なります。

ヘッドが よごれない ように するには、無水アルコール または ベンジン を ガーゼに しませて、テープが こすって いく ヘッドと ローラーとを しばしば そうじ して ください。

- (5) 録音中の しごと

うちあわせや テストなどが おわって、録音に かかってからは

採録者は自分がきき手にならないかぎり、はなし手の目につかない場所にひっこんだほうがいいでしょう。そのほうがはなし手の緊張をやわらげたり、採録者を意識した標準語的ないいかたがでるのをふせいだりするでしょう。

いっぽう、採録者にはそのあいだに録音がうまくいっているかどうか、音量指示計に注意したり、モニター用イヤホンでききとったりして機械を監視するしごとがのこります。

さらに、あとで文字にたおしてテキストをつくる文字化のばあいのためにはなしをよくききとって必要なメモをとるといふしごとがあります。文字化するひとが話のなかみをしているかどうかといふことが文字化の能率やできばえにおおきくひびきます。たお、もし文字化のために現地のひとやあるいは学生などのたすけをたのむばあいには、できればそのひとにも現場にたちあってもらうべきです。

とるべきメモのなかみとしては、はなし手の声の特徴(あとではなし手の識別のために)、はなし手の身ぶりやその場の状況(代名詞、省略された文などの意味がわからなくならないため)、意味のわからない単語や地名、人名など録音がおわってから、はなし手にたずねておかなければならないことがら、話題のうつりかわりのさま(再生のときのべんりのため)などがあげられます。

なお、おおくの録音機についているカウンターはおなじ録音機で再生するときの目安としてはやくだちますが、機種がちがう録音機のあいだでは数字の互換性がありません。

録音がすんだら、はなし手についての必要な情報(たまえ、

性別、住所、生年月日、居住経歴、職歴など)を ききわすれない
 ように しましょう。はなしの なかみについ て はなし手に た
 ずねる ことが あれば これも わすれずに。

また、録音が すんだら 記憶が うすれない なるべく はやい
 時間に 録音の 記録を 録音テープの ケースに かきいれ、かつ
 ケースと リールとが ばらばらに ならない よう、リールに ケ
 ースとの 照合番号を つけて おけば、あとで なんの 録音だか
 わからなく なって 余計な 手間を かけたり しないで すみま
 す。

下は 記録を 記入する ための 用紙の ひとつの 見本です。

題名 マスター/コピー (巻のうちNo.)	録音方式 モノラル/ステレオ フル/2/4トラック 片道録音/往復録音 38/19/9.5/4.75cm/s
内容 (小題または話し手) (所収時間)	使用録音機
	録音日 年 月 日
	録音 場所
	録音 者名
備考	保管 者名
録音テープ整理カード(国立国語研究所) (ケースに はるもの)	リール 照合番号

104688

リール 照合番号
題 名
国立国語 研究所

(リールに はるもの)